

2020年8月16日

パンひとかけらの祈りと信仰

先日、甲子園の交流試合で逆転劇があったというニュースを目にしました。今日のマタイ福音書でも大逆転のお話を見ることができます。イエスさまは異邦人の土地を訪れ、そこで悪霊につかれた病気の娘をもつカナンの婦人と出会います。

「『主よ、ダビデの子よ、わたしを憐れんでください。
娘が悪霊にひどく苦しめられています』と叫んだ。」（マタ15・22）

従来イエスさまの行動とは全く異なる展開が示されています。「しかし、イエスは何もお答えにならなかった」（マタ15・23）。人々の苦しみに深く共感し、心を動かされ、いつくしみ深いはずの御子イエスは、ここでは婦人を無視し、沈黙しています。一体どうしたのでしょうか？ 弟子たちもカナンの婦人の願いを聞き入れるよう迫ります。再び婦人はイエスの前にひれ伏し「主よ、どうかお助けください」と懇願しますが「子供たちのパンを取って子犬にやってはいけない」（マタ15・26）と再び、婦人の願いを退けています。弟子たちの願いを含めれば三度の願いを拒否したことになり、通常は、もはやあきらめてしまっても不思議ではないムードです。しかし次の瞬間、

「主よ、ごもつともです。
しかし子犬も主人の食卓から落ちるパン屑はいただくのです。」（マタ15・27）

婦人はこの危機に抵抗し、四度目の願いを表明します。それは主への信頼と信仰をあかしするユニークな表現に変わっていきます。すると突然、イエスさまの返答も大きく変化します。「婦人よ、あなたの信仰は立派だ。あなたの願いどおりになるように」（マタ15・28）。突然、大逆転が訪れ、娘の病は快方へと向かいました。

このお話はわたしたちに、状況が悪くとも祈り続けること、信仰をもって歩み続けることの重要性について教えているように思われます。イエスさまが婦人の娘を「子犬」にたとえて話したことも気に病むことなく一主人のもとから落ちるパンひとかけらでもいただければ、きっとわたしたちは生き延びることができる一と力強い信仰を表している点が注目し値<あたい>します。まさに「あなたがたも信仰を持ち、疑わないならば...この山に向かい『立ち上がって、海に飛び込め』

と言っても、そのとおりになる。信じて祈るならば、求めるものはなんでも得られる」（マタ21・21-22）というみことばが重なります。

長引く新型コロナウイルス感染症対策は、わたしたちの世界が互いに密接につながっていることを日々、実感させます。良いことも悪いことも、一人ひとりに起きる出来事は無関係ではなく、この世界に影響を与え続けています。つまりパンひとかけらの祈りと信仰は、たとえ一人であったとしても、確実に周囲の人を照らす光となりうると言ってもよいでしょう。山を動かすひとかけらの祈りと信仰をもって、わたしたちの世界を「すべての民の祈りの家」（イザヤ56・7）としていくことができますように。

「神よ、あわれみと祝福をわたしたちに。
あなたの顔の光をわたしたちの上に
照らしてください。」
（詩編55）

カトリック立川教会 主任司祭
東京教区 ヨゼフ 門間 直輝

●年間第20主日聖書朗読箇所：

- ① イザヤの預言56・1、6-7
—答唱詩編—詩編67より
- ② ロマ書11・13-15、29-32
- ③ マタイ15・21-28